関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

出石焼・籠目小鳥細工花瓶について

著者	谷口 弘美
雑誌名	阡陵 : 関西大学博物館彙報
巻	65
ページ	8-9
発行年	2012-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023880

出石焼・籠目小鳥細工花瓶について

谷　口　弘　美

1　はじめに

精巧緻密に表現された籠目小鳥細工花瓶(写真１)が、兵庫県豊岡市の出石明治館に展示されている。高さは約35センチで、うっすら灰色味を帯びた釉薬がかかっている籠目状の器形に、ツバメが立体的に装飾されている作品である。当時の出石焼(いずしやき)の技術の高さを知ることができよう。本稿では、この花瓶の製作年代と製作者、当時の出石焼をめぐる状況について考えてみたい。

写真１　籠目小鳥細工花瓶
(豊岡市教育委員会蔵)

2　出石焼の歴史

出石焼は天明４年(1784)、伊豆屋弥左衛門が櫻尾(現・兵庫県豊岡市)に開窯したことに始まる。その後、大阪や京都などから職人や技術者などを招聘し試行錯誤をかさねるが、寛政元年(1789)、肥前松浦郡平戸領木原村(現・長崎県佐世保市)の職人・兵左衛門の招聘を期に、本格的な磁器焼成に成功する。江戸時代には山水などが描かれた染付けのやきものが多く生産されていた。

明治、大正期は近代化、産業構造の変革などが行われた時代で、欧米における「ジャポニズム」趣味の影響により日本各地で輸出用の陶磁器がつくられた。出石もその生産地のひとつで、明治９年(1876)には、失職士族の授産と出石焼改良のため「盈進社(えいしんしゃ)」が設立され、指導者として肥前松浦郡大川内山(現・佐賀県伊万里市)の陶匠・柴田善平を招聘した。盈進社では精緻巧妙な作品や輸出用の陶磁器の製作なども手がけるようになり、出石焼の名は広く世に知られることとなった。その後、明治18年(1885)、盈進社は経営難で廃業し、明治30年代には「出石陶磁器試験所」が設立されることになる。

昭和55年(1980)には、国指定の伝統工芸品に指定され、現在も数軒の窯元が陶磁器の生産を行っている。

3　本作品の製作年代と製作者

この花瓶の底には「大日本但馬國出石磁器會社 By The Artist Mr. Yasukiyo Tomoda of Izushi Porcelain Company Tajima Japan」の銘がみられる(写真２)。大日本但馬國出石磁器會社とは明治32年(1899)の県会で補助金500円の交付が決定し、郡、町の補助と当時の出石の業者が出資して出石焼の改良のために設けられた出石陶磁器試験所、もしくは同35年(1902)に併設された出石陶磁器改良会社のことを指す。その後、試験所・会社は同39年(1906)に閉鎖される。

また、銘には友田安清の作とある。友田安清は同32年(1899)の出石陶磁器試験所設立に伴い、指導教師として迎えられた人物で、明治38年(1905)まで約７年間つとめた。

出石での友田安清の滞在期間と試験所・会社の操業期間を考えると、この花瓶の製作年代は明治32年から38年頃であると考えることができる。

写真２　底の銘（籠目小鳥細工花瓶）

4　友田安清

友田安清(写真３)は、文久２年(1862)、金沢

に生まれた。幼少期から内海吉造、岩波玉山に陶画を、幸野楳嶺、池田九華、岸竹堂に絵画を学んだ。明治15年(1882)に納富介次郎より製陶着画の新法を習い、同18年(1885)に上京して、ゴットフリード・ワグネルより製陶器法や顔料調整法を学んでいる。その後、同20年(1887)、金沢に戻り、金沢工業学校(現・石川県立工業高等学校)の陶画科主任教師をつとめ、同24年(1891)に実弟吉村又男と共に友田組を創設し、洋式顔料と釉薬の製造をはじめる。そして、明治32年(1899)から38年(1905)まで指導技師として出石に滞在し、美術作品の製作や出石焼の改良につとめた。その後、帰郷し同39年(1906)、林屋組の設立に参加して、硬質陶器の製造に携わり、同41年(1908)、日本硬質陶器株式会社(現・ニッコー株式会社)と改めた後は初代技師長に就任した。大正7年(1918)、57歳で死去する。

写真3　明治45年頃の友田安清(石川県立工業高等学校ギャラリー雪章蔵)

5　友田安清の果たした役割

『但馬雑誌　第九号』(明治32年11月25日発行)にはパリ博覧会に出品した当時の状況が記載されている。

> 曾て出石陶磁器組合より巴里博覧会へ出品の為め製作中の花瓶出来し神戸へ向て発送せり、今回の出品は出石陶磁器改良教師友田安清氏の意匠に係るものにして、其製作も当地永澤信吉氏を助手として、主となる所は教師自ら技術を施し成功したるものなり、籠式菊花細工花瓶高さ一尺三寸余、胴径壱尺計、形状は三ツ耳瓶子形純白磁器にして全体悉く籠目を以て之を蔽ひ、其中間即ち胴の所五、六寸計を峰腰状に凹ませ、写生的菊花数種を取交せて其周囲に配置せり（以下省略）

上記から当時、友田安清がデザインし、当地の技術者、職人を助手にして作品の製作を行っていたことがわかる。今回紹介した作品についても友田安清がデザインし、当地の技術者、職人を助手にして製作したのだろう。

永澤信吉とは盈進社の生徒の一人で、明治期を代表する名工のひとりである。明治40年(1907)に独立し、出石に開窯する。

友田安清の写生帳についてもふれておきたい。明治20年代前半の友田安清の写生帳が残っており、そこには風景、動植物のスケッチや西洋絵画の模写などが描かれている(写真4)。この写生帳に描かれているスケッチをもとにデザインしたと思われる作品が出石に現存することから、友田安清はこの写生帳を参考にして美術作品の製作をしたと考えられる。しかし、今回紹介した花瓶のデザインのもとになったスケッチなどはこの写生帳にはみられない。

写真4　写生帳（個人蔵）

6　本作品と明治期の出石焼

明治初期の盈進社時代には籠目状の器形の作品がよくみられる。今回紹介した花瓶も籠目状の器形で、盈進社時代の作品を彷彿させる作品である。この花瓶から盈進社時代につくられていた精緻巧妙な作品が明治末期頃までつくられていたこと、また、籠目状の器形は明治期においての出石焼の特色のひとつであるということがわかった。

今回、明治32年から38年頃、友田安清によって製作された籠目小鳥細工花瓶を紹介したが、このような作品は今後も発見され、出石焼の歴史がさらに明らかになるだろう。今後とも、出石焼について調査を進めていきたい。

<引用・参考文献>

岡本久彦編、『但馬のやきもの』、船田企画、1984

出石町但馬会編、『出石・但馬雑誌』1号～10号、臨川書店、1985

松本佐太郎、『定本九谷』、宝雲舎、1940

文学研究科博士課程前期課程在学